



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2010, No. 28

【役員名簿 (2008-2010)】

代表: 村上清敏 (金沢大学)
 副代表: 喜納育江 (琉球大学)
 顧問: 伊藤詔子 (広島大学名誉教授)
 上遠恵子 西村頼男 (阪南大学)
 事務局長: 小谷一明 (新潟県立大学)
 事務局補佐: 岩政伸治 (白百合女子大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 会計: 高橋綾子 (長岡技術科学大学)
 平塚博子 (敬和学園大学)
 監事: 生田省悟 (金沢大学)
 ニュースレター編集委員:
 横田由理 (広島国際学院大学)
 木下卓 (愛媛大学)
 塩田弘 (広島修道大学)
 会誌編集委員:
 野田研一 (立教大学)
 太田雅孝 (大東文化大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 Daniel Bratton (同志社大学)
 結城正美 (金沢大学)
 コンピューターセンター:
 北国伸隆
 岩政伸治 (白百合女子大学)
 山城 新 (琉球大学)
 評議員:
 Bruce Allen (清泉女子大学)
 池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 上岡克己 (高知大学)
 茅野佳子 (明星大学)
 管啓次郎 (明治大学)
 高橋勤 (九州大学)
 巽孝之 (慶応義塾大学)
 田中恒寿 (札幌大学)
 辻和彦 (近畿大学)
 吉田美津 (松山大学)
 院生代表: 巴山岳人 (和歌山大学 (非))
 広報: 三浦笙子 (東京海洋大学(名))
 大野美砂 (東京海洋大学)
 河野千絵 (日本大学 (非))
 研究助成:
 岡島成行 (日本環境フォーラム)
 高田賢一 (青山学院大学)
 乳井昌史 (早稲田大学)
 山里勝己 (琉球大学)
 村上清敏 (代表)
 喜納育江 (副代表)

研究の蓄積ということ

代表 村上 清敏 (金沢大学)

これは苦言を呈することになるかと思いますが、10年間のASLE-Jの蓄積というのが、メンバーの発表する業績・論文の中であんまり生かされていない、あるいは言及されていない。どういう形でそれが基礎になっているのかというところが、あまり見えない。本当は使っているはずなんです。それをきちんとやってもらわないと、学会の発展、蓄積というのはないし、この学会の存在理由さえも問われることになりかねない。本来、研究者としては当然やるべきことなんだろうけど、これはお互い気をつけてやってゆかないと。個人の努力はあったわけだから、最低限、参考文献で挙げるべきで。……

上記の引用は『文学と環境』第7号、10周年記念号の座談会「ASLE-Japanの10年を振り返り、未来を展望する」における、当時の代表であった山里さんの発言の一部である。当該ジャーナルの発行は2004年9月であったから、それから6年近くが経過したわけだが、こうした山里さんの懸念は解消した、と胸を張って言えるだろうか。

残念ながら、事態はむしろ悪化しているとさえ言えるのではないかと心配している。研究の数は毎年増え続ける一方で、その間、蓄積と言えだけの、きちんとした手順を踏んだ論の積み重ねが着実にこなわれてきたかどうか、はなはだ疑問であると言わざるを得ないし、我が学会だけがそうした風潮とは無縁であったとは言い切れまい。

無論、決して悪意があつてのものではないと信じているが、先行研究を丁寧に検証する手間暇を惜しんだ結果か、あるいは、仲間内の気安さからか、当然言及すべき先行研究に触れないままに自分の論の中に取り込んでしまう傾向が、昨今、少なからず目につく。いちいち細かな点までチェ

ックできないということはあるかもしれないが、少なくとも、論の根幹に関わる部分に関しては、相当程度の注意を払って先行研究にきちんと言及するのが、山里さんが言うように、「本来、研究者としては当然やるべきこと」だと思われる。学生がレポートの中でウィキペディアを丸写ししてくるのは次元の違う話かもしれないが、そうした学生を強く叱責するためにも、この点は、研究者としての基本的な資質に関わる問題として、また、人間としての最低限の礼儀として、何度でも確認してお互い注意しなければなるまい。

ところで、代表就任時にお願いして新設してもらった「広報」委員の方々の並々ならぬご努力の結果、本学会のホームページに「会員書誌情報」が掲載される運びとなった。広報委員の皆様ならびに情報をお寄せ下さった会員の皆様にはこの場を借りてお礼を申し述べるとともに、会員相互の情報交換の場として、また、学会が社会に果たすべき責務の一端として、その第一歩を踏み出せたことを大いに慶びたいと思う。しかしながら、現段階での「会員書誌情報」が完璧なものかと問われれば、それにはほど遠いと言わなければならないのも事実である。まだまだ情報の提供が一部の会員に限られており、網羅的とはお世辞にも言えない。広報委員の方々には、長い目で見て少しずつ充実拡張できるよう心がけてほしいとお願いしてあるが、同時に、会員の皆様には、この際、代表的な業績についての情報だけでもお寄せくださり、本「会員書誌情報」が偏りの少ない、網羅的なものになるよう、お力添えを重ねてお願いしたい。

山里さんが6年前に言及していらした「学会の発展」、研究の「蓄積」、また「学会の存在理由」についての危惧を思い出すにつけても、まずはこうした情報を少しでも完璧な姿に近づけることが肝要かと思われる。それぞれの会員が何を研究領域として、これまでどういう成果を挙げてきたか、それを知れば、個人的に連絡を取って、さらに教を請うこともできるだろうし、相互に情報を交換し合うことも可能だろう。ある程度行き届いたそうした情報源の積極的な活用こそが、研究の蓄積につながるものと思われる。

それと同時に、会員諸兄姉がそうした情報を活用するにあたっては、研究者として守るべきルールの厳守が求められるだろう。すなわち、どこからどこまでは誰がどこで最初に言い出したことであり、それに自分がどういう修正を施したか、あるいは、それに自分が何を付け加えたのか、それが明示され続けられないかぎり、言葉の正しい意味での研究の蓄積はあり得ないだろう。また、そうした基本的なルールが守られないことには、情報の提供をお願いしても門前払いを喰わされるだろう。

その意味では、本「会員書誌情報」の充実は、山里さんがおっしゃった三種の神器ならぬ三種の大義、「学会の発展」、研究の「蓄積」、「学会の存在理由」の基盤をなす極めて重要な意味を持つ試みであると言えるだろうし、逆に言えば、本書誌情報の充実こそは、上述した三種の大義がある程度達成されたことのあかしとなるだろう。やっとよちよち歩きを始めたばかりの「会員書誌情報」ではあるが、親馬鹿を承知で言えば、早く独り立ちし、将来的にはアーカイブのような立派な大人に成長してくれることを祈っている。会員諸兄姉のさらなるお力添えをあらためてお願いするとともに、そうした情報を提供していただくための大前提となる、利用者側の最低限の配慮についても、お互い心したいと思う。

なお、三浦広報委員長が ASLE-US に「ASLE-J 会員書誌情報」開設の案内をしてくださった。それに対する先方のお返事によると、「素晴らしい知らせにワクワクしている」とのことであり、「夏季 ASLE ニュースで宣伝したい」とのことであった。今後は、本「会員書誌情報」が ASLE-Japan の顔となるものと思われる。化粧はともかく、せめて目鼻立ちくらいははっきりさせたいと願っている。

いま「環境文学」を教えること

三浦 笙子（東京海洋大学名誉教授）

どのような理由で私のような者が東京海洋大学で環境文学を教えることになったのかを書いてほしい、というニューズレター編集者のご要望にお答えして、お恥ずかしながら、自分の話をさせていただくことになりました。それはある記憶から始まります。

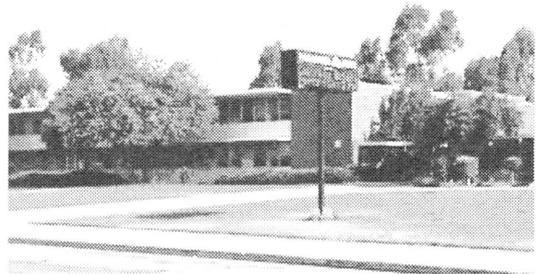
あの日は一生忘れられない日です。当時パサディナ・ハイスクールの三年生だった私は、その日の朝もいつもどおりに一時限目の社会科の教室に行きました。しかし、キャンパスがいつもと違って人影が少なく、不気味なほど静かで、教室に入ると、いつもはガヤガヤとおしゃべりしている女子や、ジョークを言い合っている男子も、部屋の中心に置かれたラジオを囲み、うなだれてラジオのニュースに聴き入っていました。二人の女子のすすり泣きが聞こえました。1963年11月22日、我らの大統領、ジョン・F・ケネディが暗殺者の凶弾に倒れ、病院で瀕死の状態が続いていたのですが、とうとう息を引き取りました。史上最も若い、ハーバード出身の教養高き大統領ケネディはアメリカ中の若者の英雄でした。そして、彼の死は私達の勇気をさらに奮い立てたのです。自分達が彼の意思を受け継がなければならない、と、そう語り合いました。私がああ1960年代にアメリカで青春を過ごしたことがそもそも、私を環境文学教育の道に向かせた要因だったと思います。

世界平和は彼の理念でした。ケネディなしでは公民権運動やピース・コアは生まれなかったでしょう。1962年、キューバで発見されたロシアの核兵器のニュースに全米が恐怖に震えました。歴史上最も世界が核戦争に近づいた時期でした。国民は慌てて地下室を核シェルターに改造し、スーパーの缶詰を買い占めました。しばらくは様子を見守っていた普段は冷静な私の父までもたまらなくなり、家族を守ろうと、地下室に缶詰を用意しました。ケネディ大統領はこの危機もフルシチョフ氏との会談で平和に解決しました。

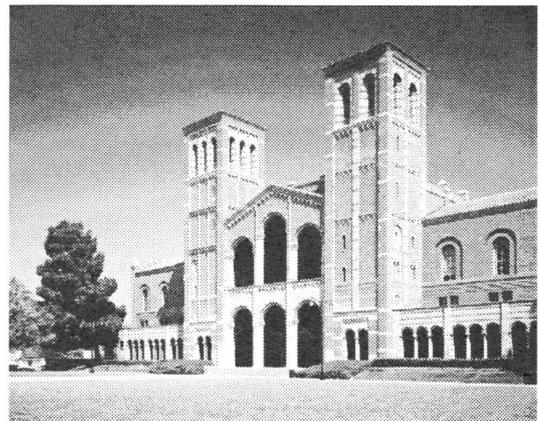
1958年夏、私は両親と姉と一緒に渡米しました。父が勤務していた海運会社の命令で、ロサンゼルスに転勤が決まったのです。会社所有の2千トンの小さな貨物船で二週間の航海の末、サンフランシスコの巨大な赤い綾取りのような金門橋をくぐり、初めて見た外国のパステル・カラーの家々は朝日に輝いていました。私の英語の知識は皆無、アメリカについても無知同然の12歳でした。それから中学校・高校をロス近郊のパサディナ市で過ごし、大学はUCLAに行きました。そのまま修士・博士の勉強に進みましたが、その間は日本でも激動の時代であったようです。高度成長、東京オリンピック、大阪万博、学生運動、浅間山荘事件……すべて私が知らなかった日本の出来事です。日本の若者は同じように意識改革の風を感じ、社会も変化したと思います。

UCLAの大学時代、姉妹校だったバークレー大学で学生運動が起きましたが、ロスではのんびりした南カリフォルニアの気候のせい、かなり緩和された形に留まり、教授のほうから「今日はバークレーの学生達に敬意をはらって、野外で授業をしよう」と、私達を連れ出した程度のものでした。でも、誰にもあの頃は若者の時代が来たという意識がはっきりとありました。ケネディの時代は意識改革・意識覚醒の時代で、この時代が開いた道はいくつもの方角に広がっていきました。

私が高校から大学の間を読んだ本の中の三冊はそれらの



Pasadena High School



UCLA キャンパス ロイス・ホール

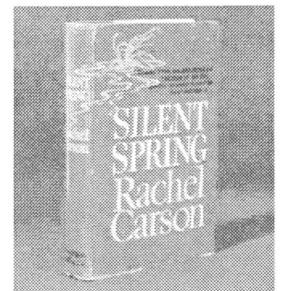
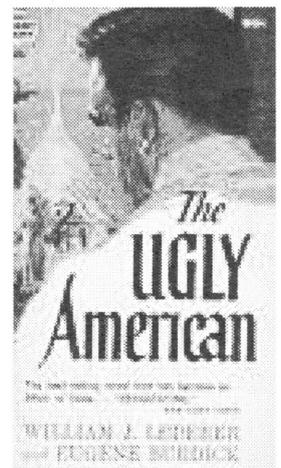
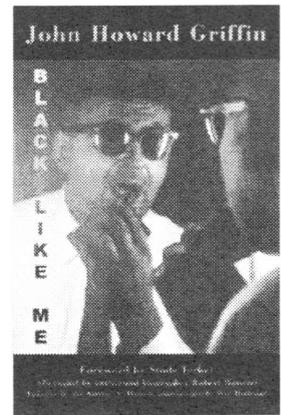
開かれた道を代表していると思います。まずは公民権運動が目指した人種差別の意識改革に道が開かれました。1961年に出版されたジョン・H・グリフィンJohn Howard Griffinの*Black Like Me*『私のように黒い夜』(1961)は白人でいながら黒人が受けている人種差別を自分で体験しようと、紫外線であえて黒く肌を焼いて南部を旅した実話です。グリフィンが鮮やかに映し出した南部の実態は私にとって衝撃でした。白人になじられ、人間以下の扱いを受け、「他者」になりきって「他者」の人生を生き、その苦悩を語った、心を揺さぶられる本でした。

次に開かれた道は50年代のアメリカ経済の目覚ましい成長がもたらした自己満足的な愛国心を覆した外交です。冷戦から米ソ対話の時代へ、ピース・コアによって若者が活躍できる舞台を海外へ、特に、当時見下されていた途上国へと道は開かれ、米国外交は新しい方向に発展しました。ユージーン・バーディックとウィリアム・レーダラー著『醜いアメリカ人』(1958)はフィクションでありながら、50年代のアメリカ外交を批判し、東南アジアの人々に溶け込んだ活動や、地域文化に開けた外交を奨励しており、あの頃ピース・コアに選ばれたかった若者の必読書でした。

さらに、ご存知のあの一冊の本によって環境問題の意識覚醒と解決へも道は開かれました。私は大学一年生のころレイチェル・カーソンの『沈黙の春』(1962)を読み、なめらかで透明な文体に誘導されているうちに、農薬の恐ろしさが氷のように背筋を降りていった感覚を今でも覚えています。美しく、怖い本でした。幼少時代に自然への愛情を母親から教わり、文学少女だったカーソンは、大学の途中で文系から理系に方向転換したため文理融合の教育を受け、『沈黙の春』が生まれました。アン・ツウインガーはカーソンという作家を「ニュー・ウェーブ」と呼んでいます(『われらをめぐる海』序文 xxiv)。まさに、『沈黙の春』は新しい波を起こしました。ケネディがこの本に深く感銘し、科学諮問会議が彼女の証言を求め、1970年にはEPA(環境保護庁)が設立されたことは有名です。でも、それは歴史上の出来事で、この本の真の価値は、そこから読み取れるあの時代の空気です。ケネディやキング牧師から若い学生までが共有した精神を『沈黙の春』は表しています。経済的に豊かだったアメリカの50年代の恩恵なのですが、カーソンが受けた教育は非常に水準が高かったといえるでしょう。この本は単にDDTの毒素を訴えた研究書だけではなく、事実を真摯に受け止め、何重にも確認し、曖昧性を省き、ひたむきに論証という思考方式を最後まで貫いた科学的・哲学的考察の手本です。我々人間が知識をどのように構築し、真実に達するべきか、その真実をどのように捉えて意識改革へ導くべきか、いかに人道的な情熱と冷静な知性の調和を得て、淡々と真実を追究するべきかを私達に教えてくれます。この真実を見極める基準がなければ意識改革などは可能でないのです。

東京海洋大学の6年前の改組の際、環境文学の科目を学部と大学院で立てることにしたのは、この精神が今の理系の学生に最も必要と感じ、微力ながらできるだけのことをしたいと思ったからです。特に、オウム真理教事件のあと、私達は「真実」がいかに人間の手によってねじ曲げられるものかを思い知りました。環境という、人間には最も身近で命に関わる問題は、文系の視点からこそ考察するべきだと私は感じました。文学の土壌で真実に対する感度を育ててこそ、カーソンのような素晴らしい科学者が生まれるのではないのでしょうか。

海洋大で設立した環境文学の科目名は、学部では「海洋文学」、修士課程では「Nature Writing 文学論」、海洋環境文学論でした。カーソンの『沈黙の春』や他の作品における汚染の問題を始めとして、フォークナーの『熊』におけるレオポルドのランド・エシックの概念、メルヴィルの『白鯨』、ヘミングウェイの『老人と海』、ノーマン・マクリーンの『リバー・ランズ・スルー・イット』の人間と自然の対決の形や擬人観(anthropomorphism)の表象などのテーマで作品を読み解き、ディスカッションは広がり、宮崎駿のアニメ作品にまで及びました。これらの作品を教えて、理系の学生たちが意外にも豊かな想像力と感性を持っていて、文学が好きな学生も多く、環境問題に強い関心があることがわかりました。



このような科目を理系の大学で立ち上げることに、学生は問題なく受け入れてくれました。一度、『沈黙の春』をこの大学で教えることをどう思いますか」と学生に聞いたことがあります。もれなく肯定的なコメントをもらいました。読んでよかったと思った学生がほとんどで、「感動した」という学生も数名いました。また、「授業で読まなかったら読む機会がなかったかもしれないから、読めてよかった」というコメントも。現在、『沈黙の春』に述べられている科学知識の一部は、新たな発見によりすでに塗り替えられており、理系の基準では価値を失っています。しかし、カーソンが見せた真実への情熱は文系の基準ではいつまでも失われることはありません。その意味でもカーソンが『沈黙の春』を書いた 60 年代は今でも私の原点であり、様々な事情が重なって海洋大に辿り着いたのですが、この本に出会った瞬間に私は環境文学を教える宿命にあったのかもしれないと、今振り返って思います。

ケネディの死の衝撃を乗り越えて、アメリカ社会は様々な意識の改革を遂げました。ジェンダーの平等、環境主義、非喫煙者の権利など、他の国では考えられない短期間で考え方を換え、新しい社会を作ってきました。幸い、日本の若者は環境意識が強く、うれしく思います。しかし、善意あっても行動なければ社会は変わりません。今の若者には行動を起こす意欲が低下しているといわれています。世界が様々な暗い要素で惑わされている今日、カーソンとケネディの時代が象徴した人類の未来への期待と、それを実現する意力を次の世代が思い起こし、受け継ぐことを切望してなりません。

〈食べ物〉と〈食べられるもの〉

結城 正美(金沢大学)

アメリカに留学していた頃、ご飯に砂糖と牛乳をかけて食べている知人を見て目が点になったことがある。本人はシリアル感覚で食べていたのだろうが、ご飯と砂糖の組み合わせになんともいえない気色悪さを覚えたものだ。たぶん似たような印象を日本の煮豆にもつアメリカ人は少なくないだろう。バイクドビーンズやチリビーンズをはじめアメリカ合衆国に豆料理は数多くあれども、砂糖味というのは、(菓子類を除けば)あったとしても傍流だろう。留学中に金時豆の甘煮が無性に食べたくなり、缶詰のキドニービーンズで煮豆をつくったことがあったが、そのときお裾分けした友人は一口食べて豆と砂糖の組み合わせに目が点になっていた。

米や豆に限らず、食べ物の調理法や食べ方は文化や国によってさまざまである。ご飯をどのように食べようが、ご飯はご飯であることに変わらないが、それをシリアルのように食べる文化もあれば、そういう食べ方に抵抗を感じる文化もある。べつに国とか文化というレベルでなくとも、たとえばご飯にマヨネーズをかけて食べることを好む人と受け付けない人がいるように、いわゆる趣味のちがいが食の見方に影響する。私たちはただ食べているのではない。食べるという行為は何らかの意味付けを伴っているのだ。

文化的に規定されているのは食べるという行為だけではない。何を〈食べ物〉とみなすかということも文化(いわゆる趣味も含めて)によってさまざまだ。〈食べられるもの〉のすべてが〈食べ物〉であるわけではなく、逆に言えば、〈食べ物〉は〈食べられるもの〉の一部にすぎない。そういうことが、古今東西の例をもとに西江雅之著『食べる』(青土社、2010年)で論じられている。

何十カ国も歩き訪ねたこの言語学者・文化人類学者からみると、現代日本の都市風景は〈食べられるもの〉に満ちているという。

東京に住むわたしが家から駅に向かう途中、驚くほどの種類の草木や虫、小動物に出会います。そして、様々な形の葉や色とりどりの花が目に入ります。何十種類もの草や木が見られます。そうしたもののの中に、毒

があるもの、すなわち「食べられないもの」は、まず見つかりません。路上には犬や猫、樹上にはスズメやカラスがいます。トンボ、チョウ、ハエ、蚊もいます。こうしたものは、すべてそのままでも、または、すこしばかり料理をすれば「食べられるもの」なのです。しかし、日本という土地では、それらは「食べ物」ではありません。

見方をちょっとずらしてみれば、自分の住んでいる土地が、食べられる草花や鳥や昆虫に満ちたゆたかな食風景にみえてくる。そういう視点の転換がもたらすおもしろさが実感される一節だ。西江氏の言葉を読みながら、煎った蜂の子を大人たちが美味しそうに食べていた1970年代の光景が蘇ってきた。小学生だった私も好奇心から口に入れてみたが、味がどうのこうのよりも、〈蜂〉と〈食べ物〉の予期せぬ結びつきに衝撃を覚えたことを記憶している。日本には、イナゴをはじめとする昆虫を食べる文化があるが、西江氏によれば、欧米文化に対する劣等感から昆虫食が衰退したようだ。そういえば、蜂の子を食べる光景を久しく見ていない。

〈食べられるもの〉と〈食べ物〉はどちらがうのか。牛肉はヒンドゥー教では〈食べ物〉とはみなされていないし、イスラム教では豚肉は〈食べ物〉ではない。宗教のちがいによって、何を〈食べ物〉とみなすかは変わってくる。ほかに、蜂の子のように、かつて〈食べ物〉だったものが価値観の変化などによりそうでなくなるという状況もある。〈食べ物〉という概念には、わたしたちが文化や伝統とよぶものが深く関与していることは疑いない。

ここで、伝統について西江氏が興味深い見解を示しているので紹介したい。西江氏によれば、伝統とは、「ある時代の、ある土地に生きる人びとが、目の前に現われた事物に対応し、なんらかの行動を起こそうとする際に、我知らず“拠り所”としてしまう事物である」。そして、そういう「拠り所」が必要になるのは「未来に向けて何らかの行動を起こそうとしている」ときにほかならないのだから、「伝統は未来である」という。伝統があるから現在は未来につながる——考えてみればそのとおりであり、これは見方を変えれば、伝統が途絶えれば未来を考えることが難しくなる、ということでもある。

伝統の衰退は現在さまざまな場面で論じられている。伝統なるものが稀薄になっている原因のひとつは、生活が仕事や勉強中心になり家族と過ごす「くらしの時間」が急激に減ったことにあると考え、「くらしの時間」を回復するためのユニークな取り組みを始めた校長がいる。香川県の小学校と中学校で、大人の力を借りずに子どもたちだけで作る「弁当の日」を設け、子どもたち(そして保護者)の食への関心を高めようと試みた竹下和男校長だ。

竹下氏は著書『台所に立つ子どもたち——“弁当の日”からはじまる『くらしの時間』香川・国分寺中学校の食育』(自然食通信社、2006年)で、次のように述べている。子どもたちが過ごす日常生活の時間を「くらしの時間」「あそびの時間」「まなびの時間」に分類すると、現在の子どもたちは学校以外でも塾や習い事で「まなびの時間」が非常に多く、その分、地域で他の子どもたちと一緒に過ごす「あそびの時間」が少なくなっている。「くらしの時間」とは、日常のくらしの衣食住に関わる時間であり、言い換えれば家庭で過ごす「家族の時間」である。

食をめぐる「くらしの時間」は減少の一途にある。仕事帰りにできあいの総菜を買い、家で器に移し替えて夕食を準備するという光景は、決して珍しいものではない。外食・中食産業の発展、冷凍技術の進歩、家電の発達などによって、「くらしの時間」が減って「仕事の時間」が増えたが、これは家事にかかる手間を仕事にまわすことで「採算」がとれる社会システムの当然の結果である、と竹下氏は示唆している。「採算」や「効率」を優先する価値観が学校教育における受験科目偏重や、それにとまなう家庭科の衰退と無関係でないという指摘もあり、学校、社会、暮らしの関係について大いに考えさせられた。

お腹が空いて何を食べるかを考えたときに「我知らず“拠り所”としてしまう事物」を伝統とよぶならば、そういう伝統はどのように培われるのか。スーパーでいつでも何でも容易に手に入る現在だが、それでも、食卓を囲んで、夏のきゅうりはみずみずしさがちがう、とか、秋の秋刀魚は脂がのって美味しい、などという会話をとおして旬の感覚は共有されるだろうし、話題が産地につながれば地産地消(そういう用語を使わなくても)の考え方に話が及ぶだろう。そういう会話は、しかし、家族が同じ食卓を囲む場合でなければなりたないのではないだろうか。中食産業の発展もあって、お父さんはカツ丼、お母さんは八宝菜、子どもはスパゲティ、といった夕食の個食化は稀ではないようだが、その場合は食をめぐる「我知らず“拠り所”としてしまう事物」が伝達されることは難しいのではないだろうか。

食をめぐる「くらしの時間」の回復——子どもたちだけで作る「弁当の日」を設定した竹下校長のねらいはそこにあるのだという。食育というと「まなび」の領域のように思えるが、次の竹下氏の説明に明らかなように、家族や地域との「くらし」のなかで実践される食育もある。

なんとか自分一人で弁当作りをくり返すうちに、「自分の食べるものを自分で作ることができる」ようになると生まれてくる自信の大きさを、大人たちは認識すべきです。親は、自分がいなくなっても生きていける人間にするために子育てをしているのです。

「親は絶対手伝わないで」とくり返され、「弁当の日」は学校給食がストップされるとなると、子どもたちは真剣に家庭科の授業を受けるようになります。わからなければ質問をし、不安であれば休日に自分で練習してみます。友だちと情報交換をし、スーパーやコンビニで食品棚の弁当を観察します。献立をたてるために本を買い求めたり、立ち読みをしたり、図書室へ行きます。親と一緒にスーパーへ行き食材を覚えていきます。子どもに内在する「生きる力」が目覚めていくときです。一人前になりたさに、親のすることを観察するようになります。

「子どもだけで作る」というきまりは、「自立」をねらっているのですが、逆説的な言い方をすると、献立から片付けまで一人でできるようになると、子どもは「自分一人では弁当を作っていることにはならない」ことに気づきます。自分のまわりに家族がいて、社会があることを知るので。

米や野菜を作る人、牛や豚を育てる人、それらの食材を運ぶ人、売る人、買うお金を稼いでいる人、鍋や包丁を作った人、ガスや電気を家庭に送ってくれる人[……。]。自分が見ていないところでたくさんの人が働いてくれたおかげで、自分の弁当作りができることがわかるのです。ですから子どもは、弁当作りで親から離れる「自立」をするのではなく、たくさんの人たちのおかげで自分があると「気づく」のです。私は、この「気づき」を「自立」と言っているのです。

「くらしの時間」がもたらす「気づき」と「自立」がいかに大きな意味をもつか、それはよくわかる。だからこそ、思うように「くらしの時間」を増やすことのできない現実にもどかしさを覚えもするのだ。

よもぎの鮮やかな緑が「雑草」ではなく「食べ物」として目に映る五月の週末、草団子でもつくりながら、せめて家の周りの「食べられるもの」を「食べ物」として味わう余裕を持ちたいものである。

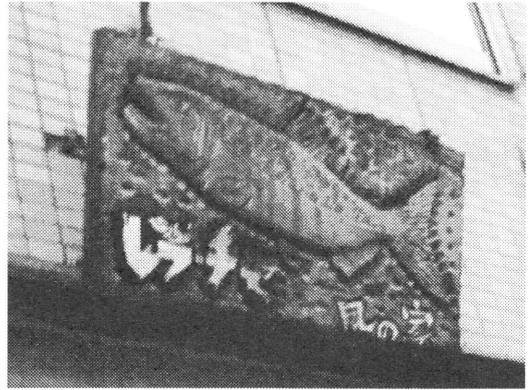
続・アイヌ民族に〈環境正義〉を～「場」を求める声に耳を傾けて

茅野 佳子(明星大学)

2009年8月30日、ASLE-Japan 清里大会2日目の夜、レラの会（首都圏アイヌ民族の組織の一つ）会長の長谷川修さんを招き、「アイヌ民族に〈環境正義〉を」と題するワークショップを開き、これまでの活動と最近の政府の動きに対する思いに耳を傾けました。その後、皆さんは、アイヌの声に耳を傾け、アイヌ文化に触れる機会があったでしょうか。また、アイヌ政策をめぐる政府のその後の動きを追うことはできたでしょうか。2009年7月に「アイヌ政策に関する有識者懇談会」の



最終報告書が提出され、その中で国民への教育・啓発の必要性が明記されていましたが、アイヌ民族をめぐる問題について主要メディアが取り上げることは相変わらず非常に少なく、関心をもっていてもなかなか情報は入ってこない、というのが現状ではないかと思えます。この10か月ほどの間にも、いろいろなことがありました。その中で、今回は、長谷川さんが講演の冒頭で紹介していたアイヌ料理店「レラ・チセ」のことを書きたいと思えます。



2009年11月7日に、中野のアイヌ料理店「レラ・チセ」（アイヌ語で「風の家」を意味する）が閉店しました。8

月にこの店で長谷川さんとワークショップの打ち合わせをしたのですが、私にとってはそれが最初で最後の「レラ・チセ」体験になってしまいました。中野駅北口商店街を歩いて10分ほどのところに、狭い敷地に建てられた3階建ての「レラ・チセ」があり、ドアの上に、首都圏在住の星野工さんが作った大きな木彫りのサケの看板が飾られていました。（写真1&2）アイヌの儀式カムイノミを執り行えるよう囲炉裏を切った部屋もあり、店全体に首都圏に暮らすアイヌの思いが満ちているのを感じました。

その日は、3階の部屋で長谷川さんを中心に「有識者懇談会の最終報告」についての勉強会があり、私も参加させていただきました。その後、賑わう店内の片隅のテーブルで長谷川さんと打ち合わせをし、アイヌ料理を味わって帰ってきたのですが、地域においても、アイヌの間でも、「レラ・チセ」はしっかりと根付いている感じが感じられ、まもなく閉店してしまうとは思いませんでした。あとで新聞の地方版に載った小さな記事を見つけましたが、この歴史的に重要な意味をもつアイヌ料理店の閉店を、メディアが大きく取り上げることはなかったのではないかと思います。

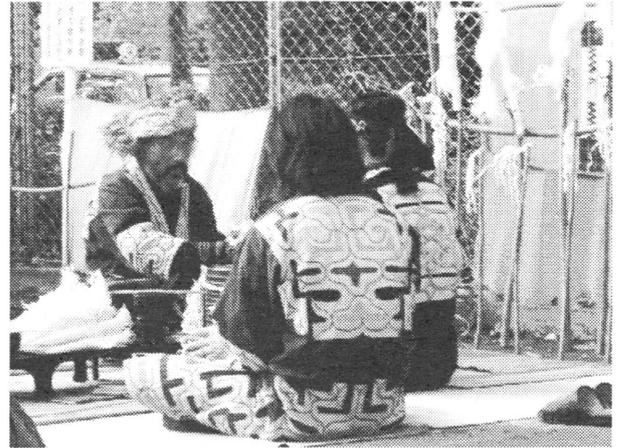
1994年に「レラ・チセ」が早稲田に開店した経緯やその後3年間の様子について、『レラ・チセへの道—こうして東京にアイヌ料理店ができた』（レラの会著、1997年）に詳しく記録されています。1983年に首都圏で活動をしていたアイヌの女性たちが中心となって発足した「レラの会」が、東京にアイヌ料理店をつくりたいという具体的な目標をもち動き始めたのが88年、それから6年の歳月を経て、多くの人々の支援を集めて実現したのが「レラ・チセ」でした。長谷川さんはこの「レラ・チセ」設立運動に途中から参加するようになったということです。

『レラ・チセへの道』によると、この運動の中で掲げられていたスローガンは、「アイヌ民族の料理を食べられる店を！」「アイヌ民族が自由に寄り合い交流できる場を！」「アイヌ民族の文化を継承し、発展させる拠点を！」の三つでした。中でも「自分たちの集まる場をもちたい」「心のよりどころとなる場所がほしい」という強い思いが、運動を支えていたことがわかります。さらに「レラ・チセ」は、非アイヌである一般の日本人とアイヌとの交流の場や、アイヌ料理を通してアイヌ民族の存在とその文化を伝える場としての役割も担ってきました。

2000年に「レラ・チセ」は早稲田から中野に移りますが、このときの経緯について、店長代理を長く務めた広野洋さんが、2008年に行われた講演の中で、次のように語っています。それまでは土地も建物も借用していたのだが、ローンを組んで土地と建物を手に入れ、カムイノミという儀式ができるように囲炉裏を作り、遠くからやってきた仲間が泊まれるようにシャワー室も作り、布団も用意した、と。儀式も文化の伝承も、生活の中で、生活の一部として行われなければならない、そのための環境を整えてほしい、という首都圏アイヌの訴えはなかなか政府には届かず、自分たちで作らなければ実現しないという思いが強くなっていたのです。

1997年に制定された「アイヌ文化振興法」も、東京八重洲に作られた「アイヌ文化交流センター」も、伝統文化や儀式を生活と結びつく形で推進しようとするものではありませんでした。「文化交流センター」はビルの3階にあり、アイヌ語やアイヌ文化を学ぶ講習会を定期的に行っていますが、料理をするための設備も、またアイヌにとって大切な儀式カムイノミをすることのできるスペースもないのです。

先祖の地を離れて暮らす首都圏在住のアイヌが集い、活動するには、そのために使うことのできる「場」が必要です。千葉県君津に浦川治造さんが自力で建てた、「カムイミンタラ」（アイヌ語で「カムイの遊ぶ庭」を意味する）という文化交流のための施設も、昨年木更津に宇梶静江さんが自分の年金で家を借り、女性が集い文化伝承やワークショップを開けるようにと始めた「ハポ工房」（「ハポ」はアイヌ語で「母」の意味）も、その必要から生まれたものでした。しかし、やはり経済上の問題が大きく立ちまわり、壁に直面しています。



（「2008年のチャランケ祭でカムイノミを執り行う長谷川さん」）

2003年から毎年夏に港区芝公園でおこなわれている先祖供養の「東京イチャルパ」も、公園の片隅のスペースを使用する許可を得るまでには、大変な苦労があったと長谷川さんは語っています。また、「レラ・チセ」は、「東京イチャルパ」や毎年10月末～11月初旬の週末に行われている「チャランケ祭」のときに、イナウ（儀式に必要なカムイへの供え物で、柳の枝を削って作る）やトノトというお酒、アイヌの伝統料理を準備する場でもありました。「レラ・チセ」に集うようになって、世代を越えたつながりができ、活動を始めた若いアイヌもたくさんいると聞いています。「レラ・チセ」が閉店となり、今後それに代わる「場」はできるのだろうか、「東京イチャルパ」や「チャランケ祭」の準備はどこでできるのだろうか、そのことがとても気になります。

「レラ・チセ」閉店の理由は、不況下での売り上げ不振で赤字経営が続いたことにある、と新聞の記事には書かれていました。有識者懇談会の最終報告書には、「民族共生の象徴となる空間の整備」や「土地・資源の利活用の促進」、「生活向上関連施策」等が明記され、「アイヌ政策を総合的に企画・立案・推進する国の体制の整備」のために、12月にはアイヌ政策推進会議が発足しています。「民族共生の象徴としての空間の整備」については、推進会議で実現に向けての話し合いが始まろうとしているようですが、そんな中で、アイヌ民族が集い伝承活動を行う場として、また非アイヌとアイヌとが交流し理解を深める場として、すでに大きく貢献してきた「レラ・チセ」が閉店に追い込まれたことは、本当に残念でなりません。

2009年2月刊行の『インパクション』に、「必要なのは今を見据えた議論」という長谷川さんの論考が載っています。この中で長谷川さんは、この30年間「ウタリ対策」として実施されてきた政策では、北海道外のアイヌは対象とされてこなかったことを指摘し、道外においても北海道と同じように、伝承活動や土地・資源の利活用（例えば、近くにある国有地を伝承活動に必要な場所として利用すること、等）を求めていきたい、「文化を継承していくためには、土地も必要だし、自然環境も環境権も当然要求されなければならない」、「それをひっくるめて文化の伝承というものを要求していく」と書いています。不当に奪われた文化を取り戻すには、文化を育んだ環境も取り戻す必要があり、このことは、アイヌ初の国会議員を務めた萱野茂さんも、国会での発言の中で主張していたことでした。また、土地とのつながりという意味では、先祖の地を離れても、今暮らしている場で、そのつながりを育てていこうというのが、首都圏アイヌの願いなのです。こうしたアイヌ民族の切実な要求を踏まえて、清里でのワークショップのタイトルを「アイヌ民族に〈環境正義〉を」とし、そして今回の報告をその続編としました。

今年の新潟での大会も、首都圏で活躍するアイヌの講師を招聘し、アイヌの歴史や文化を学ぶ機会をもちたいと願っていたのですが、残念ながら実現できないことになりました。そこで、みなさんにぜひ読んでいただきたい講演記録を二つ紹介させていただきます。いずれもアイヌ文化推進・振興財団が毎年行っている啓発・普及セミナーの講演報告集 (<http://www.frpac.or.jp/rst/sem/index.html>) に載

っているものです。

長谷川修「東京イチャルパへの道—開拓使仮学校付属北海道土人教育所について」

(<http://www.frpac.or.jp/rst/sem/sem2010.pdf>)

弓野恵子「イフンケ 母サキのイフンケに守られて一心の子守歌を次の世代に伝えたい」

(<http://www.frpac.or.jp/rst/sem/sem1805.pdf>)

長谷川さんはこの講演の冒頭で、自分に「オシケオプ」（はらわた／心）という意味のアイヌ語の名前をつけてくれた祖母の思い出を語っています。命ある者、心あるものとうまくつき合い、話ができるアイヌになるようにという願いがこめられていたのではないかと、長谷川さんは考えているそうです。そして、幼い頃、その祖母が日本人に徹底的にいじめられていた姿が、今も一枚の絵のようによみがえってきて、それがトラウマのように自分の出発点になってしまっていると書かれているのを読んだとき、私は大きな衝撃を受け、長谷川さんの背負っている歴史の重さを実感したのでした。

弓野恵子さんは、昨年私の勤める大学の学科のイベントに来ていただき、お話と文化紹介をしていただいたのですが、祖母から伝えられたヤイサマ（即興でそのときの思いをうたう歌）を母の遠山サキさんが泣きながら口ずさんでいたのを思い出さそうです。十数年前までアイヌであることを隠すようにして生きていたという弓野さんは、今ではアイヌのあらゆる文化を学ぶことが楽しくて、次の世代に伝えたいと願い、北海道に暮らすお母さんを訪ねては多くのことを学び、千葉県のご自宅で実践しています。伝統料理や野草の知識、刺繍、織物、ウポポと呼ばれる歌やムックリの演奏、そしてユカラ。アイヌ語の弁論大会で優勝したこともあり、財団に文化アドバイザーとして登録し、アイヌ文化の普及に貢献しています。私は弓野さんから心に残るアイヌ語をいくつも教えてもらいました。

今を生きる私たちが歴史の過ちを正し、アイヌ民族と新たな関係を築いていくためには、今を生きるアイヌの人々が背負っている歴史の重みを知り、そして今の思いに耳を傾けることが必要であることは言うまでもありません。先日、故萱野茂さんの命日である5月6日に民放で特集があり、萱野さんは、「自分たちの先祖が犯した過ちを今いる人たちが直すということだから、これはアイヌ民族だけの問題ではなく、日本人であるあなたの問題なのです」と語りかけていました。これは長谷川さんも繰り返し訴えていることです。

長くなりましたが、最後に、うれしいニュースを一つご報告します。2008年に北海道で開かれた「先住民族サミット」で、ニュージーランドや米国ニューメキシコ州の先住民族とアイヌの交流が始まり、この4月には、北海道と首都圏のアイヌ女性がニューメキシコを訪問することになりました。これはAIO (Americans for Indian Opportunities) というアルバカーキに本部のある米国先住民族の組織からの招待により実現したもので、AIO主催のリーダー養成プログラムに参加するためでした。近いうちにその報告会が開かれる予定なので、またあらためてご報告したいと思っています。ちなみに、今年3月にニューメキシコを訪れたとき、プエブロ文化センターとサンタフェ・インディアン・スクールのオーラル・ヒストリー・アーカイブを見学したのですが、長い年月をかけて、現地の先住民族が文化と教育を自らの手に取り戻していった経緯がよくわかり、大変感動しました。世界の先住民族との交流を通し、アイヌ民族が文化と教育を自らの手に取り戻すための、大きな一歩を踏み出せることを心から願っています。

補足：長谷川さんはご事情により石原という姓に改名されましたことをここにご報告いたします。

Winter on the Lake (2009~2010)

エリー湖の冬

松永 京子(ペンシルヴァニア州立大学エリー校)

「気が滅入る都市トップ 100」に入るといわれているペンシルヴァニア州のエリー市に移り住んでから9ヶ月。¹ エリーで過ごした初めての夏は文句なく快適だった。避暑地として知られるプレスク島のゆっくりと流れる午後、湖に反射する美しい夕日、地元で有名なレリッシュがおいしい Sara's のホットドック。エリー湖から南に向かって車で20分ほど小高い丘をのぼると、新しい勤務先のペンシルヴァニア州立大学エリー校(通称ベランド)が見えてくる。ハマール製紙会社で成功したベランド家が寄付した地所につくられ、米国各州から集められた様々な木が植えられた緑豊かなキャンパスだ。ベランド家が母屋として使っていた建物が学長や学部長のオフィスになっていたり、もともと納屋だった建物が研究室の一部に改築されたりしているものなかなか趣深い。地域と深いつながりを持つこのベランドのキャンパスには、現在約4,700人の学生が通っている。



エリー湖の夕日(筆者撮影)

「で、いったい何で気が滅入るの?」エリー初心者私の質問に、同僚も学生も意味深な笑顔で答えてくれた。「冬まで待ったら分かるよ。」仕事始めの書類提出と授業の準備でいつの間にか過ぎていった8月。空いた時間のほとんどを引越しと授業の準備に費やした9月。学会発表と授業の準備に追われた10月。気がつくまでエリーは冬を迎えていた。

エリーに住んでいると lake-effect snow(湖水効果雪)という言葉をよく耳にする。冬の冷たい風が、比較的暖かい湖面からの水蒸気を受けて雪雲をつくり、沿岸部に大量の雪を降らせる現象のことである。エリーは湖に沿って立地しているため、毎年大雪に見舞われる。それも冬の間ずっと、べったりと重たい雪が冷たい雨と交互に降り続ける。全米で13番目に降雪量が多い都市といっても実感がわからないかもしれないが、実際エリーに住んでみると、湖の気候によって日常生活が大きく左右されることが分かる。日中の短い冬は毎朝真っ暗な中を通勤。もちろん雪が降っても休講になることはめったにないので、雪が降ることを前提に早めに出勤する。大雪で停電になれば、授業はしばし中断される。雪かきは日常生活の一部で、芝刈り機と一緒に自家用の除雪機をガレージに常備している家庭も少なくない。私のように除雪機を持ち合わせていない家では、冬の間シャベルを使って雪かきをする。水漏れするボートに乗り合わせ、ボートが沈まないようにひたすら水掻きをするように、冬の間ずっと、シャベルを動かし続ける。水気を多く含んだエリーの雪は、雪というよりもかき氷に近く、シャベルの先は重たい。日中の短さとは反対に、エリーの冬は長く永久に続くかのように思える。

エリーのダーク・サイドは冬の日中の短さや降雪に限らない。湖や自然に恵まれているかに見えるこの街だが、実は産業都市としての歴史を刻んできた。レイチェル・カーソンの生家があるピッツバーグから車で約3時間離れたところに位置するエリーは、バッファロー、クリーブランド、トレド、デトロイトといった都市にも近く、これらの都市と同様に rust belt(ラスト地帯)² の一部を成している。アメリカの西漸運動において鉄道のハブとして活躍し、

¹ 「気が滅入る都市トップ 100」についてはエリー出身の学生が教えてくれた。全米の都市を比較した調査らしいが出典は分からない。

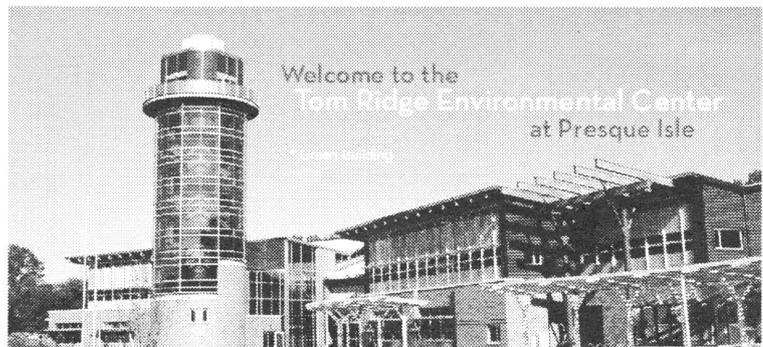
² 昔は重工業で栄えたが、今は衰退してしまった米国北部の工業地帯のこと。

産業革命では鉄鋼業の発展に貢献した。また、ハマーミル製紙会社、電気式ディーゼル機関車の生産で知られる GE Transportation (もと GE Rail)、全米のプラスチックの 10%以上を生産している Plastek Industries, Inc. などといった産業は現在も続いており、工業都市エリーの歴史は長い。だが、その代価は決して小さくはなかった。工場からの廃棄物は大気中や湖に排出され、1960 年代には、エリー湖は「五大湖のなかで最も汚染された湖」となった。エリー湖は夕日が美しいことで有名だが、この美しさも日の光がスモッグに反射してできた汚染の産物であるといわれている。環境破壊が進んだエリーでは、70 年代末に浄化運動が起こり、今日見られる自然の美しさがようやく回復されつつあった。しかし、近年の不況の影響により、経済成長のためには環境を犠牲にしても構わないという風潮が再び生まれはじめている。昨年度は GE Transportation で 5 千人が解雇され、これは 10 万のエリーの人口の約 5%にもものぼる。不況の悪化を防ぐためにはどのような産業でも受け入れるべきだとする市政のあり方—例えばタイヤ焼却工場をエリーに移設しようとする動きなど—が、エリーの自然や住民の生命を脅かしはじめている。

一方で、自然環境の改善や環境教育を促進しようとする動きもある。2006 年、プレスク島州立公園の入り口に、Tom Ridge Environmental Center (トム・リッジ環境センター) が設立された。トム・リッジ環境センターは、プレスク島の文化や動植物を紹介したり、環境保護団体をサポートしたりする環境施設である。環境教育にも力を入れていて、子供たちが地域の自然環境を学ぶことのできる設備や、地元の大学などの教育機関が利用できる、エリー湖の生態系を調査するラボラトリーなどが整えられている。地域の自然環境の理解を促すと同時に、多くの人々がこの施設を訪れることによって地域経済を活性化することがセンターの目的の一つでもある。

環境教育と地域経済を結びつけようとするトム・リッジ環境センターの試みは、プラスチック・エンジニアリングなどの分野が盛んなベランドのキャンパスでも行われてきた。例えばビジネス・ライティングを教えている同僚は、「エリーにおけるグリーン・エコノミー」をテーマに、地元の企業が環境問題とどのように向き合っていくべきかを考えるプロジェクトを授業に取り入れている。アメリカ文学と世界文学を担当することになった私もまた、Ruth L. Ozeki (ルース・オゼキ)の *My Year of Meat* (『イヤー・オブ・ミート』) や *All Over Creation* (『オール・オーバー・クリエーション』) といった環境ホルモンや遺伝子組み換え作物の問題をテーマとした小説を授業に取り入れることで、企業と環境の関係を学生に問いかけることにした。『オール・オーバー・クリエーション』のディスカッションでは、地元のファーマーズ・マーケットやオーガニック・ショップについての情報交換や、アグリビジネスと環境運動のかかわりについての活発な意見交換が行なわれた。エリーで環境文学を教えるということは、自然環境や経済状況も含めて、私自身がエリーという街を学ぶことなのだ改めて感じた。

5 月を迎え、エリーにもようやく遅い春がやってきた。湖岸の散歩や Sara's のホットドックを楽しみながら、私はエリーに住むということについて考える。もうしばらくすると、夏の避暑地を求めて観光客がエリー湖に押し寄せるだろう。そして夏が終わると彼らはそれぞれの場所に戻っていく。けれどもエリーの住民は、夏が終わってもこの場所に住み続ける。長い冬がやってきても、湖や土地が汚染されても、この土地で生きていかなければならない。エリーに住むということは、エリーの冬と共に生きるということでもある。冬を乗り越えるために、快適な夏の間、私たちは何ができるのだろうか。



トム・リッジ環境センター 出典 <http://www.dcnr.state.pa.us/trecpi/>

「環境文学のすすめ」について

松岡 幸司(信州大学)

昨年の全国大会のラウンドテーブルでも報告させて頂いたが、昨年度より信州大学の共通教育課程で、環境科目の一つ「環境文学のすすめ」の講義を担当している。信州大学は、「信州大学環境方針」として「教育・研究活動を通じて、環境マインドを持った人材を育成」することを掲げており、全学生が1年次に「環境科目」を2単位必修として履修しなければならない。上記講義はこのうちの一つの選択肢となっている。

そもそもこの講義科目の担当を申し出たのには、次のような目的がある。

- 自然・環境体験を、「知識」としてではなく、「こころの体験」としてとらえる
- 「文学体験」を、単に「こころの体験」として考えるのではなく、現実世界との関連を意識したものとする
- 環境問題を「自分の問題」として、実感をもってとらえられるようになる
- 自然や環境へと目を向け、実際に足を向けるきっかけを提供する
- 文学体験を求めるようになるきっかけを提供する

一番の根幹にあるのは、「情報やデータに振り回された環境知識ではなく、こころの問題として現実感覚を伴った環境意識を育てたい」という思いである。キャンパスのISO取得や、それに付随する「ゴミ分別意識」といった「制度や決まり」ではなく、文学を通して「こころの体験⇒現実感覚」を伴った自然体験をして欲しい、ということである。

とまれ、言い出したのはよいのだが、実際に15回の講義を組み立てるとなると、これがまた難しい。教科書や扱う作品の選択、テキストの準備など、苦労と手間のかかることが山積みである。そんな中、とりあえず以下のような内容でスタートした。

1. オリエンテーション:環境って何だ?
2. 「自然と人間」の関係
3. 「文学と環境」について
4. H.D.ソロー:『森の生活』
- 5-6. レイチェル・カーソン:『沈黙の春』、『センス・オブ・ワンダー』
- 7-8. 宮沢賢治:『注文の多い料理店』
- 9-10. グリムの森:記憶の集積
- 11-12. ヘルマン・ヘッセ:自然との対話
- 13-14. シュティフター:穏やかな法則, 場所の感覚
15. 期末試験

教科書:野田研一『自然を感じるこころ。ネイチャーライティング入門』(ちくまプリマー新書)

参考書:野田研一『交感と表象。ネイチャーライティングとは何か』(松柏社)

受講学生は約90名集まった。普段ドイツ語の授業で10~40名程度の学生しか相手にしていない私にとっては、かなりの大人数である。授業自体は、一方的な講義では眠くなるだけなので、5~8人程度のグループワークを適宜取り入れて、学生たちに自主的に考える機会を与えるようにした。そのようなことよりも苦労したのは、教材作りである。4回目以降は、学生に作品を読んでもらい講義の中で話をしていくのであるが、これら全ての作品を学生に買わせる、というのは非現実的である。そこで、それぞれの作品の扱う箇所をコピーして配布することにした。作品の該当箇所を縮小コピーしてから、A3一面に見開き4ページ分(計8ページ)を2~4面をコピーして配

るのである。しかしそれだけでは学生は読んでこないで、配布時(つまり、扱う前の週の授業終了直前)に「読むためのキーポイント」を提示し、その視点から読んで考えてくるテーマを指定し、翌週の授業では、その宿題を前提として授業を進めた。授業の最後には、出欠席確認も兼ねてリアクションペーパー(授業内容に関する質問に答えさせる)を配布して、理解度と自分の講義の反省の確認に使用した。期末試験は、講義内容の確認と、授業で扱った作品を一つ学生に入手させ、その作品を読んだことを前提に問いに答える問題を出題した。つまり学生は、全作品の抜粋プリントと、自分が気に入った作品を(一応)読んだことになる。

このエッセイのテーマはFD(授業改善)のためのものではないので授業の反省や改善方法については別の機会に記すとして、今回初めてこの講義を企画・担当して一番悩んだことは、教科書ならびに作品の選定、そしてテキストの準備である。この点については、まだ実際にこの授業が開講される前、つまり昨年の全国大会のラウンドテーブルでも話題になり、問題として取り上げられたのであるが、「環境文学教育」を考える上で大きな問題であると思う。

1. 教養科目のための教科書がない

昨年そして今年は、野田先生の新書を使っているが、この本と参考書に指定した本(専門書あるいは専門基礎にあたるもの)の間にあたるものがないように思う。つまり、文系理系を問わず、それまで「文学」というものに接する機会があまりなかった学生に対する導入として環境文学全般を扱う教科書のようなものが、今後は必要なのではないか、と思う。もちろんASLEのメンバー自身には全く必要のないものであろうが、英米文学を専攻としていない学生に対しても使用し得るものの作成をASLEでも考えていくべきであろう。

2. 授業に使えるようなテキスト集(アンソロジー?)の必要性

概論的な授業をやるとすると、一人の作家あるいは数人の作品選集というようなものではなく、扱う作家・作品は多様なものであった方がよい、と思い、今回は先述のような選択(私自身がドイツ文学出なので、どうしても偏ってしまうが)になったが、もっと広い範囲から様々なテキストを集めたアンソロジーのような読本があると、授業だけではなく一般読者にとっても有益ではないだろうか?ラウンドテーブルの際に、キープ協会の川嶋先生は、「山を歩いている時に、持ち歩いて朗読できるようなもの」の必要性を訴えておられたが、そういうハンディなもの、講義で使う副読本的な、ある程度各テキストの長さがあるもの、これら両方が必要なのではないか、と思う。これは、ややもすれば自分の専門領域にこもりがちな専門家が、視野を広げて様々な自然に目を向けるためにも有益なものであると思う。例えば、(私を含め)ASLEの会員諸氏が、自分の専攻分野の作品以外のものに触れる機会を得るためにも。

英語はもとより翻訳を含め日本語でも、かなりの数の「環境文学」関連書籍が出版されており、大きな本屋に行けばすぐに探し出せるようになってきているが、一般読者や学生たちが「手に取り易い」形のものはまだ多いとは言えないだろう。自然破壊や環境問題について語られるようになってもうかなりの年月が過ぎた今、大学の教育や研究者の間だけではなく、一般の人々が「こころの問題」として環境をとらえるためにも、そして読書という「こころの体験」をするようになるためにも、「環境文学」ができることは、まだまだあり過ぎるように思う。

現代ネイチャーライターの横顔(13)

アリス・ウォーカーのネイチャー・ライターとしての横顔

大野 美砂(東京海洋大学)

学部の学生だった頃にアリス・ウォーカーの『カラー・パープル』を読んだとき、主人公のセリーが人種差別的で性差別的な社会の中で女性同士の連帯によって自分の生きる道を見つけ、ひとりの女性としての自我に目覚めていく姿に感動し、ウォーカーは私の大好きな作家の一人になった。最近、ヴードゥーについて調べていたときに、ウォーカーがヴードゥーを通してグラ・ニール・ハーストンと出会い、ハーストンの作品やヴードゥーに関す

る研究から大きな影響を受けたことを知った。ウォーカーへのハーストンやヴードゥーの影響は、特に自然描写の中に見られると思う。

ウォーカーは1960年代後半にヴードゥーについての資料を探していたときに、ハーストンの『騾馬とひと』に出会った。『騾馬とひと』は、民俗学者でもあったハーストンがフロリダで調査をしたときの状況とそこで収集した黒人の民間伝承やヴードゥーの儀式の方法を記録したものだ。当時の白人民俗学者による人種差別主義的なヴードゥー研究に絶望していたウォーカーは、ハーストンからヴードゥーについての資料を得ただけでなく、その後熱烈に信奉することになる先駆者に出会ったのだった。ウォーカーは1973年にハーストンの生誕地フロリダを訪れ、ハーストンの墓に「南部の天才」と記した墓石を建てているし、いくつかの作品をハーストンに捧げている。*

『騾馬とひと』でハーストンが紹介するヴードゥーの儀式やまじないは、水、薬草、植物油といった自然の中にあるものを多く使って、黒人使用人に理不尽な態度を取り続ける白人農園主、黒人女性を苦しめる黒人男性などに呪いをかけ、不思議な力で弱者を救う。また、『わが馬よ、語れ』は、ハーストンがジャマイカやハイチでヴードゥーや黒人文化を調査した結果をまとめたヴードゥーの研究書であるが、そこでは、男性優位のカリブ社会で何の特権ももたない黒人女性たちが、自然の場で自然との儀式的コミュニケーションを行うヴードゥーの儀式を通して、植民地のイデオロギーに抵抗する思考の枠組みを得ていく姿が描かれる。

ウォーカーがハーストンの描くヴードゥーから受けた直接の影響は、短編小説集『愛と苦悩のとき』に収められている「三十年後の復讐—ハナ・ケムハフ」に見られると言われているが、その他にも、ウォーカーの様々な作品の特に自然描写の中に、ハーストンが伝えたヴードゥーや黒人文化の伝統が受け継がれていると思う。ウォーカーの多くの作品で、木や植物、先祖伝来の土地といった自然はヴードゥー的な不思議な力を持ち、黒人女性などの社会的弱者に、自分たちを抑圧する社会や価値観に抵抗する手段を与える。

例えば『メリディアン』で、サクソン・カレッジの構内にあるソジョナーと呼ばれる木は、神秘的な力で弱者たちを救う。まずソジョナーの木は、アフリカ伝来の魔法の力や呪いと結び付けられる。この木は、サクソン・カレッジの土地が農園だったころにルーヴィニーという名の奴隷女性が植えた木であるが、ルーヴィニーは西アフリカの故郷では、木に含まれる繊維を使って犯罪者を探り出す仕事をする家で育った。彼女がアメリカに来て、ある日、白人の子どもたちに恐い話を聞かせてやっていたときに、自分が働く農園主の一人息子が心臓麻痺をおこして死んでしまい、その罰として、舌を根元から切り落とされる。そのときにルーヴィニーは、アフリカの生まれ故郷の呪いを使って舌を返してほしいと頼んだ後、自分の舌をソジョナーの木の下に埋める。その後何十年も経って、ソジョナーの木は大きく育ち、神秘的な力で弱者を守る不思議な木になる。周囲が農園だった頃には、奴隷たちが隠れる場所となり、その木の枝に隠れてしまえば、逃げてきた奴隷は決して見つかることがなかった。サクソン・カレッジになってからは、ソジョナーの木を囲んで踊るダンスは、カレッジの行事の中で唯一、階級、人種、成績に関わらず、すべての学生を結ぶ儀式となったし、両親も親類も友人もなく生きてきた少女ワイルド・チャイルドが妊娠し、交通事故で死亡し、教会で葬儀をすることが拒否されたとき、その棺の置き場所を提供したのはソジョナーの木だった。メリディアンもサクソン・カレッジに入学して精神的にひどく落ち込んだときに、ソジョナーの木の下に座り、慰めを得る。メリディアンはこの木に座るといつも、ひとりではないのだと感じる。

黒人女性の連帯から、アメリカ先住民、第三世界の人々など、世界中の抑圧された人々との連帯を求める活動や創作を続けるアリス・ウォーカーは、とても魅力的なネイチャー・ライターでもある。そして、ウォーカーが描く自然には、ウォーカーがハーストンから受け継いだアフリカの伝統の影響が流れていると思う。

* アルマ・S・フリーマン著、河地和子訳「ゾラ・ニール・ハーストンとアリス・ウォーカー—源泉と未来をむすぶ絆」『わたしたちのアリス・ウォーカー』（御茶の水書房、1990年）pp. 307-322 は、ウォーカーとハーストンの出会いやハーストンとウォーカーの描いた女性たちの類似点を論じている。

饒舌な草花—梨木香歩とセアラ・オーン・ジュエット

山本 洋平(立教大学・院)

ネイチャーライティング作品を読んでいると、当然のことながら、たくさんの植物の名前に出会う。その固有名詞を知らない場合、3通りの読者の反応が想定される。(1)あまり気にせずに読みとばす。(2)面倒くさいながら仕方なく調べる。(3)好奇心いっぱい調べる。

おそらく(1)が多数派だろう。環境文学研究者なら(2)の手段もとる人もいるだろう。(3)のように振る舞える読者層も確実に存在するが、少数派ではないだろうか。かく言う私は典型的な文学青年出身なので、断然(1)であり、その作品が研究対象の場合(2)の手段をとる。(3)のように好奇心いっぱい個々の植物のことを調べることなどなかった—梨木香歩とジュエットの作品に出会う前までは……。

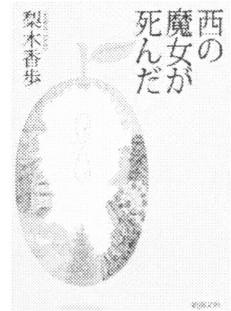
その作品とは梨木香歩『西の魔女が死んだ』(1994)と Sarah Orne Jewett の *The Country of the Pointed Firs*(1896)のことである。両作品は、時代も国も異なるにもかかわらず、不思議な共通点がいくつか見いだせる。例えば、人を癒す特異な能力をもつ寡婦が活躍すること、主人公/語り手が自然豊かな場所に一時的に身をよせるという設定、男性キャラクターの影が薄い(かのように見える)こと、などである。そして両作品を環境文学として読む場合に、特に気になるのは、どちらの老婦人も植物に詳しいという点である。

「西の魔女」のおばあちゃんの庭には、大きな榎の木が立っていて、裏庭には、「葱、山椒、パセリにセージ、ミントやフェンネル、月桂樹」が植えてある。今にもいい香りがしてきそうな庭である。裏の畑にはレタスとキンレンカが育っている。それらを使って英国人のおばあちゃんと日英ハーフのママ、そして「まい」が三人で、サンドウィッチをつくる場面があり、読むだけでゆったりとした休日の気分になる。ちなみにキンレンカとは金蓮花と書き、食用の赤や黄色の花である。ウィキペディアによればクレソンのような味がするらしい。ちなみに花言葉は「愛国心」。「ちなみに」という箇所が、文学青年から環境文学者への自分なりの変容というか、好奇心で調べた箇所である。(とは言え、ほとんどがウェブ頼りなのだが)

他方、『尖ったもみの木』の Almira Todd 婦人は、メイン州の海岸沿いの Dunnet という村に住み、薬草師 (herbalist) を営んでいる。アルマイラの庭はこんな感じだ。試訳してみよう。

彼女のハーブ菜園には質素な薬種が育っていて、よくあるハーブのなかに貴重なものや珍品も交じっていた。鼻を刺すような変わった匂いが、まどろみの感覚を呼び覚まし、忘れていた過去を思い出させる。かつては聖なる未知の儀式のためのもので、そのようなハーブを駆使できるのは何世紀もの間、魔術的な知識とされていた。ところが今では、糖蜜、酢、蒸留酒をトッド婦人の小さな釜で調合すれば慎ましく出来上がる。……彼女が処方するのは、おそらく人が被る月並みの痛みだけではなかった。あたかも愛と憎しみと嫉妬と海の向かい風が、トッド婦人の庭に育つ不思議なほどたくましく見える植物のなかから、ふさわしい治療法を見出しているかのようだった。(6-7)

ここで引用した箇所は、ネイチャーライティングという文学様式でしか描きえない植物の表象ではないかと思う。植物は色や匂いや効能をもっており、人間の身体や記憶におおきな関わりをもつ。これは事



典や図鑑では表現しえない植物の姿である。近代化が治癒を医療へと「脱魔術化」し尽くそうとしていた 20 世紀への転換期に、ジュエットは、植物と人間との情緒的な関係を描き、消費社会から距離をおく自然の「再魔術化」を試みようとしていたのではないだろうか。

『尖ったもみの木』のトッド婦人が村人にたびたび処方する薬草に“pennyroyal”という植物がある。たしかに小説のなかで不思議なくらいこの薬草が頻出する。何か象徴的な意味があるのかしらと思って『リーダーズ』で調べると「北米産のハッカ」とあり、「精油を民間療法・防虫剤に用いる」と続く。このような簡単な説明に満足しない George Smith という研究者がいて、この薬草の歴史的な用途に注目して論文にしている (“Jewett’s Unspeakable Unspoken” *Modern Language Studies* 24, 1994)。19 世紀末の北米では“pennyroyal”という薬草は妊娠中絶薬として用いられていたというのだ。そして本作品を、女性同士の“romantic friendship”の実践者としてのジュエットによる、近代核家族を再生産する父権社会と結婚制度に抗するテキストであると結論づける。たしかにこの論文は“pennyroyal”の用途の立証については眉唾物だし、一足飛びに父権制への抵抗と結論するにはロジックの層が不足しているかに見える。だが、より重要なことは、ある植物が特定の歴史的役割なり物語を暗示する可能性があり、その視点がダイナミックな議論に展開する可能性があることである。この論文から学ぶことは多くある。

『尖ったもみの木』で培った植物への繊細な眼差しでもって、『西の魔女』を再読してみると、新鮮な発見があった。なかでも、中学生のまいの「敵」のように描かれる「ゲンジさん」と植物の関係がとても重要であることに気づいた。ゲンジさんは、まいの「サンクチュアリ」にドタドタと土足で侵入してくるような典型的に「マスキュリンな」人物として描かれているかに見える（映画版では「キム兄」こと木村祐一の名演が光る）。しかし本当にそうだろうか。おばあちゃんが亡くなった後、ゲンジさんがやってきて、「一回りも二回りも小さく見える身体を、折り曲げるようにして」ある花を差し伸べる—銀龍草という腐生植物である。

「ギンリョウソウ」と読む。この「ユウレイタケ（幽霊茸）」という呼称をもつ、花というよりはキノコに近い形態をした植物は、おばあちゃんの亡き夫、つまりは、まいのおじいちゃんのお気に入りだった。まいは、この不思議な見た目の植物を「ほとんど陽も届かないはずの場所」で発見して、おばあちゃんに「新種かもしれない」と報告していた。その伏線と、ゲンジさんが銀龍草を持ってくる場面が響きあう。（この銀龍草のくだりは映画版には出てこない。）ちなみに銀龍草の花言葉は「そっと見守る」なのだそうだ。

あともう一点、『西の魔女』には重要な植物がでてくる。ワスレナグサによく似た、さらに一回り小さい花—まいが勝手にヒメワスレナグサと命名していた可憐な花である。「ヒメー」という接頭辞は「一回り小さい、よく似た植物」に付けられる。ゲンジさんは、まいの「ヒメワスレナグサ」を見て言う。「キュウリ草がようけ咲いとるのう」と。まいの可愛がっている花は「キュウリ草」という名だと知る。フェミニンな命名とは大違いの名前である。

キュウリ草を調べてみる。見た目は本当にワスレナグサによく似ている。そしてとても小さい、誰にも気づかれないほどに。その植物の名を知っているゲンジさんという人の印象がここで変容する。ちなみにキュウリ草の花言葉は「親しい人への真実の愛」とのことである。

書評

書評 Rowan Jacobsen, *Fruitless Fall: The Collapse of the Honey Bee and the Coming Agricultural Crisis*. New York: Bloomsbury USA, 2009.

浅井 千晶(千里金蘭大学)

本書は2008年9月に出版されて反響を呼び、2009年には最新情報“Afterword: 2009 Update”を付した新版が出た。2009年1月には、邦訳『ハチはなぜ大量死したのか』(中里京子訳)が文藝春秋社から刊行されている。著者 Rowan Jacobsen は環境や食物をテーマに執筆するアメリカ人ジャーナリストであり、他に *A Geography of Oysters: The Connoisseur's Guide to Oyster Eating in North America* (2007)、*The Living Shore: Rediscovering a Lost World* (2009)などの著作がある。昨年5月に来日した際には、農林水産省を訪問して当時の石破茂農林水産大臣と対談するなど、日本の各メディアでも取り上げられた。

2006年11月、フロリダで一人の経験豊かな養蜂家が400箱の巣箱からミツバチがほとんど消えていることに気づく衝撃的な場面から本書は始まり、Jacobsen は「蜂群崩壊症候群」(Colony Collapse Disorder=CCD)と名づけられた、この奇妙な現象を追及していく。ここ数年、主にアメリカやヨーロッパで働き蜂が帰巢せず、巣に女王蜂と幼虫が残され、結局コロニーが崩壊する現象の原因を、携帯電話の電磁波説、遺伝子組み換え作物説、新ウイルス説、細菌説、昆虫の神経に影響する農薬説、地球温暖化説にいたるまで、その可能性を検討していく。さらに2000年代に入り、高収益をもたらすアーモンドに授粉するために経済効果を第一にミツバチの繁殖戦略がねられ、グローバル化した農業経済に巻き込まれたことが語られる。ミツバチは低栄養で過重労働に従事せられ、ストレスもCCDの原因の一つと想定される。この犯人追及の過程で浮き彫りになるのは、コロニーが崩壊するのも無理はないと思えるミツバチの劣悪な生存環境である。これはミツバチだけの話ではないだろう。副題に「ミツバチの崩壊と来たるべき農業危機」とあるように、今日の農業全般に関わる問題である。

状況は深刻だが、著者の意図はミツバチが減少している謎の現象を扇情的に扱うことではない。本書は、生命の営みの不思議さ、美しさについても教えてくれる。第2章“*How the Honey Bee Conquered the World*”では、高度に発達したミツバチの社会がいかに精巧なものかを記述し、ミツバチという昆虫のすばらしさを伝えている。また、第10章“*The Birth of Beauty*”では、受粉を促進するために地球上に花が誕生したことが語られ、ミツバチを始めとする昆虫と花との共進・共生関係に驚異の念を抱いた。

本書が私の注意を引いたのは、*Fruitless Fall*(実りなき秋) というf音を二つ重ねた、明らかにレイチェル・カーソンの *Silent Spring*(沈黙の春)を意識したタイトルだった。実際、第1章“*Breakfast in America*”には、カーソンが新種の農薬や殺虫剤が鳥の鳴かない「沈黙の春」をもたらすと警告しただけでなく、ミツバチにとどまらず野生のあらゆる受粉昆虫が消滅することを憂慮し、「花粉交配が行われず、果実の実らない秋」が来ることも警告していたことを、『沈黙の春』から該当箇所を引用して評価している。最終章“*Fruitless Fall*”で、毒を盛り、棲みかを破壊して花粉媒介者を排除した実りなき世界と希望と可能性と新たな生命を産み出す情熱的な羽音に満ちた世界のどちらを選択するかはあなた次第であると読者に選択をせまる点、“*Epilogue: First Frost*”の末尾が“*The gardens, abuzz with purpose only seconds ago, go silent.*”(217) と“*silent*”という単語で終わることにも『沈黙の春』への意識が感じられた。*Fruitless Fall* は、人類がたどりつつある道を少し先に行った生物の物語として読むことができよう。

ミツバチの失踪はおそらく複数の要因が重なって生じたもので、原因を一つに特定できないだろう。しかし、邦訳の解説で福岡伸一が述べるように、本書はミツバチの奇妙な失踪に関する興味深いレポートというだけではなく、工業化された農業の抱える問題、生態系の危機など、より大きな問題についての告発の書であり、すぐれた環境問題の書である。

書評 Lord Christensen, et al eds.

***Teaching North American Environmental Literature* (New York: MLA, 2008)**

中垣 恒太郎(大東文化大学)

MLA が刊行している文学の教育実践(Options for Teaching)にまつわるシリーズの一冊。このシリーズは1970年代にまで遡ることができるようであるが、刊行が活発になってきたのは1990年代以降のことであり、教育実践への関心の高まりを反映している。近年では、「ホロコーストの表象」、「スペイン市民戦争の表象」、「オンライン文学」、「グラフィック・ノベル」、「イタリア系アメリカ文学」など細分化されたテーマも目立ち、今後より一層、注目されるシリーズとなるであろう。

環境文学に関しては、実はすでに先行して、Frederick O. Waage, ed. *Teaching Environmental Literature: Materials, Methods, Resources* が1985年に同シリーズから刊行されている。本書 *Teaching North American Environmental Literature* はある意味で前書の改訂版に位置づけられる存在でありながらも、あえて書名をわざわざかみかみすることにより、独立した研究書として世に送り出した背景からは、環境文学研究および大学カリキュラムをめぐる、この20年間に起こった劇的な変化のあり様が浮かび上がってくる。

本書 *Teaching North American Environmental Literature* は4部構成から成り、第1部では「背景」として、まずは前書および本書の編者に名を連ねる Frederic Waage によって、「カリキュラム上における環境文学の歴史的発展」の経緯が展望されている。本書の特色として、とりわけ多様性が強調されており、Ursula K. Heise による“Teaching Ecocritical Theory”、Catriona Montimer-Sandilands によるエコフェミニズムにまつわる論考、Karla Armbruster による「文学コースにおける動物研究の教育実践」などの論考が収められている。さらに第2部では「北アメリカの環境文学を位置づける」試みとして、「メキシコ系環境文学」、「カナダ文学における文化的差異と生物多様性」、「21世紀における環境文学への展望」などのテーマが扱われている。

第3部では「方法論」・「学際性」・「場所」の3つの観点からアプローチを大別した上で、ケース・スタディに重きを置いている。「方法論」重視のパートでは、「モダニズム」、「第二次世界大戦後のアメリカ詩」、「アフリカ系アメリカ文学」、「先住民アメリカ文学」、「比較文学」、「アカデミック・ライティングのクラスで『沈黙の春』をいかに扱うか」など、それぞれ環境文学との関連を考察した各章が並び、「学際性」重視のパートでは、「北米環境文学に与えた東アジアからの影響」、「文学映画における環境正義の問題」、「多文化主義と環境倫理」、「エコフェミニスト環境文学」などのテーマが扱われている。「場所」重視のパートでは、ネヴァダ、テキサス、LA、カナダ、メキシコなどの具体的な地名にまつわる各論を通して、「場所」「ホーム」「コミュニティ」などの概念に光が当てられている。

第4部は「資料集」として参考文献リストが掲載されており、「エコクリティシズム」、「メキシコ系の環境文学」、「ナチュラル・ヒストリー」、「ネイティブ・アメリカンの環境文学」、「宗教と自然」、「エコフェミニズム」、「環境正義」、「教育実践」などの細目ごとにまとめられている。

Scott Slovic, Cheryll Glotfelty, Glen A. Love をはじめとする、全体で30を超える論考は、環境文学の教育実践の現在を展望するのに十分な多様性と活力を示してくれるものであり、とりわけ現在、何らかの形で環境文学の教育に携わっている日本の研究教育者には多くの具体的な示唆を与えてくれるにちがいない。

近年、日本の大学においても、文学環境論コースや環境文学に関する講座は増加の傾向にあり、また、何らかの形で環境文学にまつわるクラスを設置している大学はすでに多く見られるが、日本の大学を取り巻く様々な制約により、制度的にコースを設営できない例もあるであろう。本書は網羅的に、北米の大学におけるカリキュラムの現状を展望するものでこそないが、今後、日本の大学に環境文学のコースないし授業をより一層根づかせていくためにも、北米での実践例を参考に、日本の現場ではたしてどのような取り組みが可能であろうか、という命題について本書は改めて考える契機を与えてくれる。

書評 エイモス・ラポポート著、大野隆造・横山ゆりか訳
『文化・建築・環境デザイン』彰国社、2008

清岡 秀哉(明治大学理工学部博士後期課程)

「デザイン人類学」という学問領域をご存知だろうか。その可能性が現在探求の途上にあるこのデザインプリンについては、未だ導きとなる書物が乏しい状況であるが、そんななか、エイモス・ラポポート(建築・文化人類学)の長年にわたる仕事の厚みがコンパクトに凝縮された本書は、「デザイン人類学」への格好のガイドとして読むことができる。

建築家に呼びかける形で書かれている本書は確かに、建築家こそが第一に読むべき書物であるだろう。とはいえ著者ラポポートは、造園も、都市デザインも、建築も、インテリアデザインも、一つのシステムのなかで扱う部分が違うだけなのだと考えている。つまり、彼にとって「デザイン」とは常に一つの「全体」なのであり、その意味で本書はあらゆるデザイナーに向けて書かれていると言える。さらにラポポートは、広い意味において人間の手が生み出してきた風景の総体と言える「文化景観」というものを、多くの人びとが時間をかけて下してきた無数の独立した決定の結果だと考えている。本書のタイトルに「環境デザイン」という用語が使われている所以である。別の言い方をするなら、われわれが日常的に目にするほとんどすべての景観——高層ビルから植樹された雑木林に至るまで——はデザインされているが、しかしそのデザインの主体は複数かつ匿名であり、それゆえ万人が多かれ少なかれデザイナーであるということになる。つまり本書は、あらゆる人間に対して呼びかけられた書物だとも言えるのだ。

ラポポートは本書で、われわれの活動における「意味」をもっとも重要視する。まさにこの点こそが、本書が「デザイン人類学」と深く交錯する部分であり、ラポポートが人類学から最大の恩恵を受けている部分でもあるのだが、さて、ここで言う「意味」とは何か。「意味」は通常、「機能」の余剰であると見なされがちであるけれども、ラポポートはむしろ「意味」こそが「最大の機能」であると考えている。潜在的な夢や願望という「意味」が、通常の意味における「機能」や「必要」を凌駕して迫り出し、われわれの行動を支配することのほうがむしろ多いのだということをラポポートは強調する。「物質文化はステータスを伝達する」という彼のテーゼにおいては、「ステータス」を「意味」と読み替えればよい。

また、ラポポートは本書において、環境と行動を考えるうえで「クリティカルリティ」という考え方が重要であると説く。「クリティカルリティ」とは、病気や加齢や異なる文化圏に投げ出されたことなどによって適応能力が減衰している人々に対して環境がどれほどの負荷を与えるかという基準であり、それが高ければ危機的な状況という意味になる。彼の言う「クリティカルリティ」の考え方は、デザインの仕事に携わっていても私にひとつの示唆を与えたが、それは、社会的弱者のためのプロダクト・デザインの思想であるユニバーサル・デザインが、マス・プロダクションがその原初において持っていた社会主義的な夢——一方でそれは資本主義的な夢であったことをわれわれは今日知りすぎているが——を、「クリティカルリティ」という発想を導入することで奪回しようとしているのではないかという示唆であった。ラポポートはバナキュラーな環境に導入された近代的普遍主義がいかにその環境を壊滅させていったかという多くの事例を引きながら、バナキュラーな環境へのイーミックな眼差(ある文化の構成員の視線から物事の価値を判断すること)の重要性を説く一方、完全な相対主義はあり得ず、ユニバーサルなものが確かにあることを認める。バナキュラーなものへの眼差を徹底した先にそれでもなお立ち現れてくるユニバーサルなもののために、われわれは今後、それを理論やモデルへと鍛え上げ、デザイン

の実践へと生かしていく必要がある。ラポポートがそうしたデザインの実践に与えている最大のヒントは、「オープンエンドなデザイン」という考え方だ。旧来の意味での「デザイナー」という主体の権威の痕跡を、ものや景観から限りなく消し去ること、そして作者と使う者という二元論を超えて「デザイン」が万人によってなされなければいけないことを静かに呼びかける本書は、実用的でありながらもすがすがしい思想をもった書物だ。

ASLE-J-Grad Journal No. 8
文学と環境—素朴な疑問から
小椋 道晃(立教大学・院)

<文学>と<環境>という言葉が組み合わさると、ある種の胡散臭さを感じるのは私だけでしょうか。つまりそこには、社会的、政治的な問題としての環境問題と、個人的、審美的なものと考えられる(あるいは、そう考えたい)文学研究とが交差することによる、食べ合わせの悪さのようなものがあるのではないかと。文学・環境学会という組織があると知ったとき、どうしても、このような居心地の悪さを拭い去ることができませんでした。

この学会が、実は私の身近に存在していたことを知ったのは、つい数年前です。私は、高校を卒業したのち、金沢大学に入学し、どういうわけか、アメリカ文学を専攻することになり、そして立教大学の大学院に進学しました。これまでの進路は、特に自分の意思で選んできてきた、というよりも、ただ流れるままに進んできたという印象が強いのですが、今振り返ってみると、どちらも ASLE に縁の深い研究者、たとえば、金沢大学には現在の代表である村上先生が、そして立教大学には野田先生がいらっしゃる場であった、ということに改めて気づかされました。そのような奇妙な縁(勝手なこじつけかもしれませんが)もあって、昨年、先輩に声をかけていただき、なかばノリで、清里で行われた全国大会に参加させていただきました。

文学を研究している者のひとりとして、たとえば、テキストにおける<自然>の表象や、場所をめぐる作家の思索ということ自体に対する興味というのは当然ありますが、<環境>に対する意識と、文学作品を読むこととの関連性が、つまり、その意義が、どれほどの目的をもってなされているのだろう

か。そもそも文学を「読む」ことが文学研究の目的であって、環境正義を唱えることが目的ではないのではないかと、というような素朴な疑問がありました。

ところが、清里の全国大会に参加してみて、徐々にではありますが、その意味が分かるような気がします。というのも、自然と人間との関わりというのは本質的に「文学的」なものであるでしょうし、文化研究としての自然表象の考察などは、文学作品の読みそのものへの多様なアプローチのひとつとして、それ自体がスリリングな研究になることを感じたからです。もちろん、本学会は、文学だけではなく、その他の芸術、メディア、あるいは科学、哲学といった幅広い視座で、それぞれの専門分野を越境しつつ議論し、発信していこうとなさっている方々の集まる場であるため、何かしらの争点をめぐって政治的に結合するというような妥協の精神はないだろうと思います。そして、私自身も、<文学>と<環境>が交差する本質的な部分について、引き続き考えていきたいと思っています。

文学・環境学会発足から20年近くも経ち、このニューズレター自体がすでに27号も出ているにもかかわらず、いまさら、勝手なことを書き連ねてしまいました。無知ゆえに、ひとりよがり、ナイーブなことを申し上げている感は否めないのですが、そのあたりは、先生方、先輩方のご意見を頂戴いただければと思います。末筆ながら、この度、院生組織のひとりに加えていただけることになり、この場を借りてご挨拶をさせていただきました。皆様、どうぞよろしく願い申し上げます。

広報からのお知らせ

昨年度に始めた会員書誌情報リスト作成につきまして、ご報告を申し上げます。まずは、多くの情報をお寄せいただき、本当にありがとうございました。エクセルへの入力作業などに手間取り、リスト作成までに思わぬ時間を要してしまいましたこと、お詫びを申し上げます。岩政先生や北国先生のご助力を得て、3 月半ばに ASLE-J のウェブサイトにもリストを掲載いたしました。ASLE-J のトップページからは「出版物」→「会員による出版物」→「文学・環境学会 会員書誌情報」の順番でアクセスできます。URL は次のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/pdf/aslej-bibliography.pdf>

リストは日本語での活動と英語での活動に分け、それぞれに「1. 著書」「2. 論文」「3. 翻訳」「4. 書評」「5. エッセイ」「6. 学会発表」「7. 講演」「8. 環境に関する活動」「9. その他」の項目をつくりました。「9. その他」には、「環境に関する内容を含む教科書」という小項目をつくりました。日本語での活動は情報提供者名のあいうえお順に、英語での活動はアルファベット順に並べています。このリストにつきましては、ASLE-US にも報告しておりますので、海外からの反応も期待されます。

みなさまから提供していただいた内容を書式や記号の統一以外ではそのまま掲載したつもりでおりますが、私たちの間違いがあるかもしれません。ウェブページをご覧ください、訂正すべき点を広報委員までお知らせいただけましたら幸いです。また、文字の大きさや濃淡、全体のスペースのバランスの調整が難しく、今後の課題がいくつかありますが、少しずつ改善していきたいと思っております。文字の大きさにつきましては、コントロール・キーとプラス・キーで調整することができるようになっています。

今後定期的にリストの更新をしたいと思っておりますので、新しい情報を広報委員までお知らせください。リスト更新は半年に一度ほどを予定しておりますが、情報のご連絡はいつでも受け付けております。今回は情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。

広報委員へのご連絡は、これまでと同様に、東京海洋大学の
大野美砂 までお願いいたします。

最後に、何度も助言をしてくださりました代表の村上清敏先生、ウェブアップロードの作業をしてくださりました岩政伸治先生、北国伸隆先生に、お礼の気持ちを表したいと思っております。ありがとうございます。

まだ始まったばかりの書誌情報リストの試み、これからもどうかご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

広報委員 三浦笙子 大野美砂 河野千絵



事務局より

2010 年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会を新潟県十日町で開催します。

2010 年度年次大会

○日程: 2010年8月27日(金)～29日(日): 2泊3日

○会場: まつだいふるさと会館(〒407-0301 新潟県十日町市松代 3816 番地 1 TEL: 025-597-3442、

HP: <http://www.echigo-matsudai.com/cgi-bin/kaikan/index.cgi>)

スケジュール

第1日目 8月27日(金)

参加受付 11:30～13:00

役員会 11:30～12:30

開会の辞 村上清敏(代表:金沢大学) 12:50～13:00

シンポジウム1 13:10～14:40 司会・発題者 結城正美(金沢大学)

「食をめぐる言葉の風景——宮沢賢治、石牟礼道子、村上春樹を中心に」

発表者:高橋世織(東京工業大学)、高橋龍夫(専修大学)

研究発表1 14:50～15:20 司会 高橋昌子(三重大学)

斉木 美知世(武蔵野音楽大学大学ほか・非)

「自然現象と言語現象～文学作品に見る「吹く・鳴く・咲く」の捉え方を中心に～」

研究発表2 15:30～16:00 司会 高田賢一(青山学院大学)

川谷弘子(東京農業大学・非)

「『ビーバーのしるし』を読む～少年たちの建国物語を通して、自然と文化との共生の道を探る～」

研究発表3 16:10～16:40 司会 中垣恒太郎(大東文化大学)

高田賢一(青山学院大学)

「多文化主義で読む絵本」

研究発表4 16:50～17:20 司会 ブルース・アレン(清泉女子大学)

生田省悟(金沢大学)

「知里幸恵『アイヌ神謡集』序を読む」

講演「松之山の棚田の四季」 17:30～18:30

棚田写真家 佐藤一善氏 司会 「森の学校」キョロロ 大脇淳氏

「棚田マップを作成した一善さんに、妻有の松之山の棚田を紹介して頂きます。これまで数々の写真集を出してきましたが、そのなかからとっておきの棚田を教えてもらいながら、棚田の基盤整備や温暖化による雪の減少における問題点を、地元で伝わる言葉の解説と共にお話し頂きます。」

第2日目 8月28日(土)

自然体験プログラム 8:40～13:00

「松之山・松代の棚田とブナ林巡り」

——松之山・松代の棚田、美人林、「森の学校」キョロロをバスでまわります。ガイドは「森の学校」キョロロの職員である大脇淳さんと写真家の佐藤一善さんをお願いいたします。汚れてもよい服装でご参加下さい。

基調講演 14:00～15:30 司会 中村邦生(大東文化大学)

「私の文学——瞬間の記憶」(仮題)

講師:林京子氏(芥川賞作家)

1930年に長崎市で生まれる。父の勤務地である上海から1945年に帰国し、長崎高等女学校に入学。8月9日、三菱兵器工場で被爆する。被爆後の体験を描いた『祭りの場』が芥川賞を受賞。その後、『上海』(女流文学賞)、「三界の家」(川端康成文学賞)、『やすらかに今はねむり給え』(谷崎潤一郎賞)、『長い時間をかけた人間の経験』(野間文芸賞)などを出版し、2005年には林京子全集が出る。

ラウンドテーブル 15:40～16:20

「私と環境文学」発表者:未定

シンポジウム2 16:30～18:00 司会・発題者 野田研一(立教大学)

「交感論の可能性をめぐる」

発表者:河野哲也(立教大学)、豊里真弓(札幌大学)、中川僚子(聖心女子大学)、山田悠介(立教大学・院)

総会 18:10～18:40

第3日目 8月29日(日)

研究発表5 9:00~9:30 司会 横田由理 (広島国際学院大学)

森田系太郎 (立教大学・院)

「環境文学はエコロジカル・アイデンティティを育む—環境文学研究者の“不安”を取り除く— (いち) 経験的研究」

シンポジウム3 9:40~11:10 司会・発題者 管啓次郎(明治大学)

「樹木 物質と想像力のあいだで」

発表者:波戸岡景太(明治大学)、清岡秀哉(明治大学・院)、伊藤貴弘(明治大学・院)、原一弘(明治大学・院)、大洞敦史(明治大学・院)

閉会の辞 11:20 喜納育江(副代表・琉球大学)

会費納入のお願い

会費未納入の方は、至急、下記郵便口座へお振り込みください。(一般 5,000 円、学生 2,000 円)

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

[編集後記] ようやく28号の発行にこぎつけました。今回は原稿集めがなかなか大変で、会員の皆様の勤務校での校務が激増している状況などが伺えるようでした。ご多忙な中で、詩を書いて下さった方があり、イニシャルでのご発表を希望されていまして、役員会での討議の結果、編集後記に入れさせていただくことになりました。お陰様で今回も読みごたえのある素晴らしい記事が揃いました。原稿をお寄せいただいた方々に心よりお礼を申し上げます。(Y. Y.)

無題

T.
T.

再生紙のノートに
エコと書き写し
面接試験では
マニユアル脱出!
専門学校の先生は
朝の授業でそう繰り返す。

人生とは

真っ青な空

ふんわりとした

一枚の画用紙であるはずなのに

すでに山は削られ

川は流れない。

紙に追われるぼくらの日々

語るべき言葉があるのではない

流通する文字だけが

ぼくらを語る

「学生さんはお客さんです」

だから世の中はやけに埃っぽく

アレルギー性鼻炎の

くしゃみは止まらない。

ぼくらの一日は

ゴミの片付けから始まる。

【発行】

ASLE-Japan/文学・環境学会

代表 村上清敏

事務局:新潟県立大学 小谷一明

〒950-8680 新潟県新潟市東区

海老ヶ瀬 471 番地

Tel: 025-270-3351

Fax: 025-270-5173

E-mail:kodani@da2. so-net. ne. jp

【編集】

編集代表 横田由理

〒739-0321

広島市安芸区中野 6-20-1

広島国際学院大学

E-mail:yokota@hgk. ac. jp

